

昭和二十七年十月十五日 発行（毎月十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

（通第四十三号）

慈光

目次

- | | |
|------------|----------|
| 祖師の聖句の意訳文 | （一） |
| 釈迦彌陀は慈悲の父母 | 花田正夫（二） |
| 日本教化の源流 | 福島正雄（七） |
| 如來の調伏を被りて | 榎原徳草（一一） |

第四卷・第十號

祖師の聖句の意釋文

ああ、不可思議の彌陀の本願は、どんなさはりにもさへられぬ光明をもつて、あらゆる人々の苦を滅しさとりのよろこびを與へて下さるのである。

南無阿彌陀佛の御名を称へれば、よろづの徳が海水のやうにみちみちて、我等の罪業のさはりを打消して、疑の雲を永く淸らに晴らして下さるのである。未の代に生れて、いろいろのさはりの多い身には、彌陀の教と、念佛の一行が、唯一無二の、我等にふさはしい道であるからひとすぢにこのみをしへを聞き、この念佛の一を行を修めるがよい。

また濁りきつた世に住む者として、智慧のまなことなり行の足となつて下さるのが、この教行であるから、何はさておいても、この本願を仰がねばならない。

行

○

大慈大悲の本願の船に乗せられて、ひかりあふるるすくひの海に浮び出ると、この上もない功德をそなへた感謝の称名は、海原を吹き渡る清風のやうに、心を爽かに静めて下さるばかりでなく、かずかずのわざはひの波を転じて、功德の潮として下さるのである。ながい無明の夜が明けて人生の、久遠の曙にあふのである。

釋迦彌陀は慈悲の父母

花 田 正 夫

親の心が子の心に滲み透るには、雨だれが絶えず庭石を打つて遂に石を穿つ趣がある。未だ母の胎内にある時から念じつづける親の心が生れ出るをきざみとして、物も言えず目も見えぬ一肉覗團上に昼夜なく夜となく無限に注がれて來るのである。そして歳月を経て父よ母よと慕ひ寄るのを機縁として嚴父、悲母として子供を護り続ける。然しここに

父は打つ 母は抱いて悲しむを

かはる心と 子やおもふらん

と昔から歌はれてゐるやうに、子供には親の表面しか見えないで、優しい母に甘え、厳しい父をうとんじ勝である。「どうも母はよいが父はこはい」と言ふ風になる。そして叱るのも、抱いて慰めるのも自分一人の上に注がれる親心の一極であるといふことが解かり難いものである。

初めて私共も亦、佛道に御縁を惠まれて、種々の慈育を蒙るのであるが、段々と御聞かせを被つて行くうちに、彌陀の母なる慈悲はいかにも有難く、うれしく響いて来るが

さて釈迦佛の父なる慈悲が受け取り難いといふことになり勝である。こここの処はよくよく氣をつけねばならぬことである。

正信偈を朝夕拜誦しても

『普く無量・無辺光、無碍・無対・光炎王、清淨歡喜・智慧身ではあるが彌陀佛はこの者の為に本願を成就して下され、現に一味平等の大悲のひかりを注ぎかけて頂くをおほえ、又「煩惱に眼障えられて、攝取の光明見奉らずと雖も大悲倦きことなくして常に我身を照すなり」との母なる慈悲是有難く感じるのであるが

「邪見嬌慢の惡衆生は、信樂を受持すること難きがなかになほ難し、難の中の難、これに過ぎたるは無し」

かくて御佛のみひかりにおさめとられて、この世の生命の終るとともに、速に光明のきはみない淨土に生れて、まことにそのさとりを身にあかし、普賢菩薩のやうな、徳を身にそなへて、永遠の活動をさせて頂くのである。

愚癡

○

賢いひとの信を聞いて、おろかな親鸞の心を打ち明ければ、賢いひとの信心のすがたは、内に賢い智慧がみちみちて居られるから、外には如何にも愚者と頭を下げるられる。愚かな親鸞の心の実態は、内が愚な者だから、外見はいかにもかしこに振舞はるにはあられない。

信老

○

ひるがへつて自分自身をかへりみると、誠に悲しむべきことは、この愚な親鸞は、何時も愛欲の広い海に沈み、名利のけはしい山に踏み迷うてゐる、必ず佛となる身の上にして頂きながら、それをそれと有難くも思はず一日一日がまごとのさとりに近づかせていただきながら、それもさほどに嬉しいとも思はないとは、まことにまことに傷ましく、恥づかしいきはみである。

一念

○

凡夫といふのは、くらい煩惱が身にみちみちてゐて欲も多く、いかり、はらだち、そねみ、ねたむこころが、ひとつきりなしにおこつて、いのちの終りまでつづきつづいて何時までもやむことなく、絶える時もないもののことである

かの如く振舞うてゐる。邪見と憍慢を脱することの出来ない自分の姿が見え、斯る者は信樂を受持することは至難であるとの叱声にあうては、誠に自分は佛法の器ではない、永劫浮ぶ瀬のない身と照されるのである。

茲に邪見と憍慢のかたまりとも言ふべき自己、恰も黒いタドン同様で、どんなに削つて見ても真黒い身でしかあり得ぬと、邪見と憍慢の中に崩折れ、埋没せしめられる。

水は低きに流れる。慈悲の法水は謙虚の心に満入するのは理の当然である。邪見と憍慢の頂に慈悲の水の宿るわけは有り得ないのだと自照せられる。斯る身には独生独死・独去獨來の暗黒界に永劫の流転がそのさだめであると知らされる。この父の叱りに呼應して

「印度西天の論家、中夏日域の高僧、大聖興世の正意を

願はし、如來の本誓機に應ずることを明す」

となつて邪見憍慢の身の故に、信樂を受持することの出来ぬ身に、母なる彌陀佛の大悲心は、三国七高僧と化現して下さつて、右に手を取り左に指し、前に導き後に寄りそひ給うて、捨てじ、離さじ、救ひ遂げずばやまじと頑れて下されるのである。

更に龍樹菩薩の章に及ぶと、そこにまた嚴父と悲母の慈声に接する。

それは地獄に墮ちることはあると

何時かは佛となる機会は来ようが

すでに独覺者となれる者は

永遠に佛道を捨てたる身となる

されば世尊は説き給ふ
生命を惜しむ者の斬首を畏れるごとく
まことの菩薩としては

独覺となることを畏れるであらう

斯うしたわけであるから求道者は「佛教の中で不退転の境地に至るべき易行の道はないかと」求めるであらう。然しこの要求は、元來意志の弱い卑怯者の言ふことで、大夫の言ふべきことではない、若し人が無上道を願ひ求めるならば、その退転のない境地に向つて身命を惜します、日夜につとめ励むべきである。助道論にも

頭髪の燃ゆるを払ふ心と
重荷になふ力をもて
不退転を求める菩薩は
常に勤めて怠つてはならぬ

独悟を求める人々ですら

おのがじし道をつとめはけむ

まして自らを救ひ、人を救ふ菩薩は

「難行の陸路の苦しきことを顯示して、易行の水道の樂しきことを信樂せしむ」

の一句である。然しこの一句について最近非常に感じさせて貰うたことは、我々は難行と易行とのみきくと、すぐ誰しも難より易だと心が傾くのであるが、それでは、「難行の陸路の苦しきことを顯示して」と聖人が特に仰せ下さつた御心を見おとすことになる。

龍樹菩薩の易行品を拜讀すると、

『菩薩が道に不退転となる為には、諸の難行を修めて漸くその境地に至るを得るのである。然るに修行の困難なために、ややもすれば菩薩をして單なる独覺者に満足せしめる進んで一切衆生を救はうという志願を退転せしめる、これは甚だ患ふべきことである。

独覺者にて足れりとするは

これ菩薩の死である

進んでひとみなを救ひ得ないならば

菩薩としての徳を失ふ

独覺者にて足れりとするは

これ菩薩の大いなる畏れである

たとへ地獄に墮ちるとも

これにまさる畏れはない

億億倍のはけみがあつて当然であらう

されば世尊も「佛道を求むる者は、三千大千世界を擧げるより重き荷を負ふ」と説き給うてゐる。然るに難行に堪えぬからといつて易行の道を求める如きは、實にこれ怯弱下劣の者と言はねばならぬ』

此れ程までに仰せられる菩薩の眞意を推し奉るとき、ここに難行の陸路の苦の顯示がある。元來佛道に志す者は釈尊の歩まれた通りの行を身命を惜します実行すべきであつて、その道が苦しい難しいかと云つて易行の道を求めようと言うのが全く横着な弱志薄行の徒である。三千大千世界をも挙げ、頭燃を払ふ如き思ひをもつてつとむべきであるとの大叱声である。大法雷である。

この御叱りが、私の甘え心、依頼心を微塵に打ち碎いて下さる、おごそかにして、きびしい御声である「お前のやうな怠け者、甲斐性なしは親でもない、子でもない、今日を限りさつさと出て行け、もう見るのもけがらはしい」との嚴父の大叱声である。

この嚴父の声によつて、出離の縁のあることなき、頭の上げやうのない身が自照せられる。これが難行の陸路の苦の顯示された姿である。ここをしつかり味ふとき、元來道を求める者は、世尊と同じ道を踏むのが本当である、それ

が出来ないといふことは自分が悪いのである。立派に歩むべき道を縊密に丁寧に説き示されてゐるのであるが、煩惱具足の身の悲しさはどうすることも出来ない。かういふことがはつきりと照し出されて来る。ところがこれを軽く見過して、難行は苦しいから駄目だ、易行の水道でなければいかぬと云ふ風になつたのは、父をうとんじて母にのみ甘えた偏つたことになる。菩薩の顯示によつて、この甘え心を破られて来るところに「諸佛諸菩薩をも軽しむべからず」といふ広大無辺な世界がひらかれる。独善、独断の迷妄が破られて來るのである。

斯くて聖道の道において頭の上らぬ身と自照せられるところに、菩薩は易行の道を説かれ、然も大叱声される菩薩御自身も、怯弱下劣の身にかへられて、ひとへに彌陀大悲の本願を至心帰命せられて居る。これ父の叱りによつて母の悲心が身にしみ、母の悲心に潤うて父の叱りの大切さも仰がれて來るのである。ここで深く知らされることは難行と易行の二つの道があるのではなく、難行の道が閉ぢて始めて易行の道が開かれるといふことである。二つの道がある、どちらでもよいといふのではない、一つの道なのである、そこに難行の道に絶望し、「いづれの行にても生死をはなるることあるべからざる」大暗黒において彌陀佛の無碍の光明が無明の闇を破り、難思の弘誓の大船があらはれ

て下さるのである。ここで難行道と易行道とを握りかへることではない、難行自力の心が碎かれて、他力易行の大道がその光明の全分を放つのである。この大道に導入せしめすばやまじとの嚴父悲母の慈悲が「難行の陸路の苦しきことを顯示して、易行の水道の樂しきことを信樂せしめ給ふのである。

更に正信偈の道綽禪師の章に行くと

「道綽は聖道の証し難きことを決して、ただ淨土の一门ありて通入すべきことを明す」とあるが、ここも聖道門は駄目だ、淨土門でなければいかぬと言ふ風になり易いのである。それでは「我宗こそすぐれたれ」といふことで「かへりて我法を破誇する」ことになる。私自身ここで懺愧に堪えないことを告白するが、過去三十年近く、眞宗でなくてはいかぬ、親鸞聖人こそ唯一の真人であると始めは聖人への崇敬の念から自然にそのやうになり、それで自分自身では一角佛法の御役に立つてゐるかによい氣持になつてゐた。然し近角先生の御提携に心ひらかれて聖徳太子の十七憲法や三經義疏の所を拜読するやうになり、太子がうぶのままの佛法に帰依してゐられてそこに宗派的偏見が微塵もなく、佛の真意一つを仰いでゐられる、濁りのなく穢れのない御德風に触れて、始めて私自身が如何に深く真

うしたやすらぎと、その全体に被る大悲がぴつたりと身に添うて味へ始めたのである。

宗といふ宗派的偏見と法執に墮して「我宗尊し」と云ふ我執に閉ぢてゐるかを照され、冷汗三斗、自ら知らず知らずに誹謗正法の大罪に陥ちこんでゐることに気づかされた佛も無い淨土も諱だと云うて正面から佛法を誇るのではなく、佛は尊い、淨土は眞実であると自分では讚仰してゐる積りのままが、佛法の仇をしてゐた、獅子身中の虫であると知られた。

それと同時に第十八願の最後の「唯五逆と正法を誹謗する者を除く」との釈尊の抑止の御文、御叱りが、そのまま私の上におちて来たのである。五逆の徒とは、これはいやといはれぬことで、現に私のことであると感じては居つたが、正法の誹謗だけはして居ない、むしろ佛法の御手伝をさせて貰つてゐるとよい氣持であるところが、そのまんまで獅子身中の虫と照破せられたのである。「唯除」の嚴命は私の上に下つた。それと同時に彌陀大悲の光明の全体が、五逆誹謗法の身の限々までをかねて知り尽くされての光照でましましたか、と身にしみて、何とも言へぬがすがしい賴もしさを感佩申し始めたのである。始め五逆は自分のことと思へても誹謗は他人事と考へてゐた頃は何だか片足で地に立つてゐるやうなもどかしさがあつたが、誹謗も我が事であつたと知られて、両足が地にやうやくついた、さ

釈迦彌陀は慈悲の父母

種々に善巧方便し

我等が無上の信心を

発起せしめ給ひけり

聖人が斯くまでに御讚歎下さる眞意に触れ始めるのである。それならもう母に甘え父をうとんする心は無くなつたのかと云ふと、仲々さうでは無い、遠い昔から纏綿としてこびりついてゐる横着心、遠慮心、邪見、憚慢心、誹謗心は、知らず知らずに我が身勝手の方に傾いてやまぬ。そこにキラツとひらめく嚴父の声、同時に包む悲母の慈懷は、

私の生命の続く限り常にやすみなくたゆみなく働いて下さるのである。還相の大菩薩の衆生を教化せられる風光を大經の序分に「法雷を震ひ、法電を曜かし、法雨を注ぐ」と説かれてゐるが、大雷雨の時は天地晦冥とでも言ふ、状態になる、特に夜中であれば、よい氣持で夢を見る時にゴロゴロウと雷鳴がひびくとハツと目がさめる、そこへビ

日本文化の源流

福島政雄

今日から日本教化の源流と題しまして、聖徳太子の御事について、教化の源流としての太子の御德を仰ぎ奉る心持で申上げてゆきたいと思ひます。大体私が太子の御精神をわかりたいと思ひたちましてから何年目でありましたか、太子について多少念入りに論文をまとめましたものがありますが、それを今度多少手を加へましてそれにもとづきまして、しかしそれについたり離れたりしながらお話を申述べてみたいと思つてをるのであります。

一、文献が豊富にあること

太子のことを述べるについてかういふことを問題と致し

ます。即ち太子文献の中で私が多少読んだり、かぢつたりしましたものについて、太子についての否賛論と申しますか、太子を讃仰するものが一方にあり、他方には太子をそしるといふ方面のものがあります。それ等の代表的だと思ひますものについて、ごく概略を、ものによつては多少立入つてお話を申上げたいと思つてをります。

この聖徳太子関係の文献と申しますと、昔から今日まで非常に沢山あります、第一その總てを集めることも困難でありますし、なかなかそんなに沢山のものを私など読めませんが、どのくらゐあるかといふことについては五十嵐祐宏といはれる東京においての若い方であります、その

方の「十七條憲法序説」といふ本がござります。その終りの方を御覽いただきますと、昔から今までの太子について書かれたものが、單行の書物のみならず、いろいろな雑誌に出ました論文の類に至るまで、ほとんどすべてを表のやうに並べて調べてをられます。それによつても太子文献がどんなに沢山あるかを知つて頂けると思ひます。

太子に関する文献は、ごく古いものでは、法王帝説であるとか、推古天皇紀を中心とするところの日本書紀などがあります。それより古いものといへば、法隆寺金堂の御本尊の光背銘、あるひは釈迦像光背の銘といふやうなものになるわけであります。

ごく大体からみまして平安朝の中頃は、社会がそろそろ乱れ始めようといふ頃であります、その頃から日本国民は太子を非常に追憶して、太子を追慕申上げてをる、かう云ふことが太子文献に現れてをると思ふのであります。つまり平安朝中期以後、鎌倉室町あたりの世の中が乱れて参りますと、日本国民はみんな太子の御事を非常に痛切に思ひ起して、太子が今一度日本國にお出ましになればよいといふ心持を起してをるのであります。大体からいつて日本国民は国が乱れ、社会に苦しさが多くなるといふときになると太子を追憶し慕ふといふ心持を起してゐる、大体の傾向があるやうであります。

カツと電光がひらめくと真暗な部屋が真昼のやうに照し出される、そこへ程なくザアーと大雨が注がれて来る。恰もそのやうに嚴父の叱りの雷鳴と電光、母の慈悲の法雨に、無限につまづいてやまぬ身を何処までも照護して下さる攝取不捨の御手のたのもしさを感じ始めたと申すにすぎないのである。

武家の時代になつて参りますと、それが違つてきて、その歴史といふものに一種の角をもつと申しますが、ある意味では偽つたところがあると申しますか、ところによつてせまつたものをもつ、かう云うものがだんだん現れて來るのであります。太平記あるひは吾妻鏡といふやうなものもさうであると思ふのであります。昔のおほらかに、ひろびろとゆたかにすべてを包んでゐるやうな歴史の姿とは

変つてしまして、何となくそれに一種のせまさをもつてあります。

それが徳川時代になりますと、なほ一層そのせまさの調子が勝つて参りまして、徳川時代に書かれた歴史、たとへば大日本史なんかはその代表的なものであります。が、大日本史になりますと、人間の姿でも、或は歴史全体の姿でも一種の型にはめて見ると申しますと、ある場合にはよほどゆがめて見る趣きが勝つてゐるのであります。忠心義士は忠臣義士一点張り、乱臣賊子だけ、丁度日劇に現れますところの善型・悪型といふやうな風に忠臣義士と乱臣賊子とが分たれてゐるやうなことになつてゐるのであります。忠心義士の姿をそのままに見たものではない。その代りに読む人に一種の感激を與へるわけであります。

しかしその感激は多少偏した趣きをもつてあります。もちろん大日本史をある意味で敷衍したやうな山陽の日本外史はさういふ型のものであります。さういふ風に歴史の描き方そのものの調子が、昔と中世と、近世では變つてきています。それにともなつて聖徳太子を見る見方が違つてきてをります。法王帝説日本書記あたりではむしろゆたかな心持をもつて太子を見つめるといふべきであります

るます。これを一面からいへば、よほど宿命論的に見てをります。だんだん落ち下つてもうどん底まできてをる。かういふ見方であります。もつともそのどん底まできたところで、この著者はどう感じてゐるか、これが問題であります。そこに種々この愚管抄の見方が違ふことになるのであります。私が感ずるところでは、どん底まで落ち下つて来たと悲観的なことを申しながら、実は腹の底には、この著者は一種の樂觀的な心持をもつてゐると感じます。が、私は感ずるところでは、どん底まで落ち下つて来たと悲観的なことを申しながら、実は腹の底には、こいはれる方があります。私の非常に尊敬する学者で昭和二十二年の春に亡くなつた東北大学にをられた村岡典嗣といふ方なんかは、この愚管抄の歴史の見方を徹頭徹尾宿命論的で、暗い見方である、全然樂觀的なところはない、かういはれるのであります。村岡さんは非常な考証学者であります。が、私共さういふ点で非常に尊敬してをる人であります。ところが尊敬はしてをりますけれども、この点については全然賛成できかねると感ずるであります。どうも最後のところを見ますと、この世はどん底まで落ち下つてゐるけれども、しかしいまから起上つてくる、かういふ心持のやうであります。佛教の考へ方、つまり大きな劫波の移り交りといふものが、いはば波のやうになつてをつて、世の中はある頂点まで上つてゆくと、すつと下つてきてどん底になる、そしてまただんだん上つてゆくといふ考へ方の考へ方が愚管抄の至るところにはつきりとした言葉で現して、佛教の劫の思想を採入れてをります。

そしていよいよ最後の結びのところで、「この世はやす

二、愚管抄

く立ち直るべきなり」といふことをいつてをりますから、全体としては全面的に立と直るまで考へてゐなかつたかも知れません。まづこの時代相應に立ち直つてくるといふ意味かも知れませんが、とにかく悲觀のどん底に一種の樂觀を抱いてゐる。かういふ心持であるやうに私は愚管抄を読んでゐるのであります。この愚管抄の中に、聖徳太子辯護論といふものがあります。聖徳太子を大いによくいはうといふ心持で述べてをりますが、ところが、この辯護論を読みますと、どうもにえきらぬと申しますか、大いに太子のため辯じてゐるやうに見えて、本当はさうではなさうな感じがするのであります。元来この人は藤原氏の出身でありますから藤原氏の辯護論を持ち出す前書きとして聖徳太子をまず辯護するといふやうな調子が見えて、どうも太子のために辯じてゐるやうに見えて、本当にえきらぬやうに感じがするのであります。したがつて、聖徳太子実錄といふ名著をお書きになつてゐる久米邦武博士は、この愚管抄の太子辯護論を批評されまして、實に腐つたやうな論であるといふことをいつてをられる、なるほどさう言はれても仕方がないといはれるほどの何か歎きの悪いものであります。かういふ感じを私自身も持ちますけれども、とにかく太子のために辯じてゐることは確かであります。それが平安朝末期、鎌倉のはじめにかかる時の、日本国民全体が、非常に悲觀してゐる生活の中に、精神的に物質的に非常に苦しんでゐるこの時代に代表思想といはれる愚管抄の太子觀であります。辯護しながら、にえきらぬことをいふ、見方であります。

平安朝の中頃からそろそろ変つてくるといふことになるのであります。が、平安朝を代表します歴史の本として愚管抄があります。この愚管抄といふ書物は、文章が非常に解りにくいものであります。そこで、その頃の俗語をさかんに使ってをりますし、文章のまかり方といふものが難しいので読んで参ります。そうすらすら読めるものではないのであります。私もこの愚管抄を読んではやめ読んではやめしてをりますし、まだ十分に読んでもるといへないのであります。が、これはどういふ書物かと申しますと、日本歴史をそもそもはじめから平安朝の末頃までを段々世の中が落ち下つたものとしてみてゐる歴史書であります。日本の歴史は始めはよかつた、段々悪くなる、次第次第に悪くなる、それを七段くらいに分けてをります。そしてこの愚管抄の著者といふのは慈圓僧上と云ふことになつてをりますが、慈圓僧上は歿年が承久の乱のころでありますから、平安末期に生きてゐた方であります。その頃になりますと世の中はこの上もなく落ち下つてしまつた。もうこの世の中に道理といふものはないだらうかといつて歎いてゐるほど、世の中は落ち下つて乱れてきた、かういふ風な見方をしてゐるのであります。つまり日本の歴史を極めて悲觀的に見て

如來の調伏を被りて

榦 原 德 草

私がお念佛申し始めましてからもう二十餘年になります。この二十餘年も唯業縁の間に間に生きて参りましたので、束の間に過ぎ去り、本年は歳も五十を二つ三つ越えました。

私は静岡県下の或る大谷派の寺院に生れましたが、私の十二歳の時、父に別れまして、母と坊ちやん育ちの私とが寺から出ねばならなくなりました。其後母は私一人のため種々と言語に絶する苦労を重ねまして、現在の京都の禪宗の荒れ寺の守りをするやうになり、私の中学二年の時母のもとに引き取られました。

それから私は禪宗の立派な僧侶にならうと決心いたしました。宗門の中に入りました。その頃の思出としまして私に深い感化を與へて下さつたが當時校長をして居られた釈守愚師であります。師は禪のさとりを得られてのちに印度の佛蹟を巡廻され、五、六年も印度に滞在して居られまして、其間オランダ人から英語を学ばれたそうであります学校では英語と宗学を教へて貰ひましたが、先生は不思議な徳を持つて居られまして、先生の前に出ると何かヒキシマル思ひになりましたし、先生の学科は自然に予習や復習

した。

大学の三年生の頃、私と緒方鎌田の両君と相談し互に大きな理想を持つて進まねばならぬといふ所から、世界佛化運動を始めました。日曜は市の衛生課に頼んで塵埃集めなどをいたしました。然し他の学生などが或は散歩し或は映画館に行きなどしてゐるのを見ては俺達は偉い立派なことをしてゐるぞと言ふ様な妙な誇りを持つてゐました。

然しへども自分が見性しなければいけないといふので、山に坐り、僧堂に坐りました。然し靜坐すればする程、自分分の亂れ心が見えて来ます。私の寺の境内に古い池がありますが、小供が魚を捕りに行つてかき廻しますと池は濁つて行つていますが、靜まりますと落葉が池の底に沈んでゐるのや藻が重り合つてゐるのや小魚の泳ぎ廻るのが手にとるやうに見えます。それと等しく修行をすればする程、無になりきれない、心の中はぐいやぐやばかりであります。私の友人の一人は見性を得たと言つて非常に嬉しさうな顔をしてゐる、然し私には駄目である。根機の劣ない身を歎いて元旦もじつとしてゐてはいかぬといふので友人三人と寺西乾山先生を御たづねました。すると先生は下手に坐られ、私共を高い所に坐らせて、菓子が出、お茶が出ました。菓子器は古い立派なものでした。先生は菓子器をあけ乍ら「容物は古う御座んすが、中味は新しう御座いま

せすには居られない」と云ふ風でした。何時もは老眼鏡をかけて居られましたが、授業中に少し餘談を雜しえられる時は眼鏡をとつて生き生きとした眼光をもつて話されました。その一つに

「我々はさとりをひらくために人間に生れたのである。おさとりをひらく時は、頭の先から足の先までシユシユと言音をたてて毒血が流れ出るその時がさとりのときである」と言はれたのを記憶して居ります。何だか謳のやうにも思へるのですが、また謳とも思はれない、兎に角大きな謎を興へて下さいました。

次に臨済大学に進みましたが、その前に二ヶ年兵隊に行きました、それは貧乏して居りましたので一年志願兵になりましたことが出来ないのでした。當時私に深い感銘を與へて下されたのは学長の神月徹宗老師であります。この方は太平洋戦争中に四國の行化中に遷化せられました。又漢文の先生で寺西乾山老師があります。この方も見性して居られる方で他の先生とは異彩を持つて居られました。陽明学を講じて下さつて心の生きた面、生命の面の儒教を教へて貰ひました。

すのでのう」と言はれて打ち笑はれました。私はそれを

聞いて、眞の道は太古に通じながら、日々に新にしてまた新たなるもので、先生は老年になられてゐるが、常に生き生きとしたものを持つて居られる、それを今見せて居られるのだと思ふと、菓子も手が出ないといふ始末でした。

又手島文蒼先生は東大出の秀才でありますと、先生のお宅に参りました。先生は當時「苦闘の歎」を著作せられましたが、私は兎に角先生を訪ねようといふので、先生のお宅に参りました。先生は當時「苦闘の歎」を著作せられましたが、我々生意盛りの青年とてすこしなめてかかりました。すると先生は

「勉強も大切で、一應何でもやらねばならぬが、何でも一つことをすつとやれば、ほかのことも自然にわかつて来るといふことは確かにことであると知らされた」

と言はれて、非常に大きな指示を貰ひました。そして、よいことを聞いた、自分は何でも見性しなくてはならぬと心に定めました。さうこうする間に学校を卒業いたしました。私は愈々修行して一流の禪僧にならうと願つてゐましたが、私の父は「わしはもう六十になつたから、お前も嫁を貰へ」としきりに勧めます。然し禪宗では結婚したら二流の人になるので、もう一流にはなれぬといふことが淋し

くてなりませんでした。然し父の勧めを度々聞いて居りましたが、内に、自分は独身では危いから嫁を貰ふのもよいといふ風に妥協し、最後は、まあ親が安心するように、親のためといふ風に心に言ひ聞かせて、外面をつくろうて結婚生活に入りました。然し内心は矢張り嫁も欲しくてならなかつたのです。結婚後一年にして子供が生れましたが、お産後に妻が氣が変になり、子供を殺すとか、お母さん子供を寝かせて呉れと云ひ、まことにお話も出来ない始末であります。そこで私は自分は早く父を亡くしたが母の力で育てられたのだから、お前はどうか寺に居てくれるやうにと度々申しましたが、氣が狂うた者の心は正氣に帰りませず遂に寺を出て実家に行つて了ひました。結婚は致しましたが妻は氣が変になりました。朝から晩まで歎息ばかりであります。お客様でもありますと平然とした顔をして居りますが内心は火の車であります。夜小供が寝つかないで苦しみ、時には夜中に泣いてやまぬ小供のために湯をわかし粉ミルクを作りますが、作り終へた頃はもう眠つてゐたり、寝巻の上に負ひ、小守歌を歌つて寺の境内を夜びついて歩いたりいたしました。かうなつて参りますと、何と言ふ自分は不幸者であらうか、世の中は真暗である。世は、いやである、一層死んだ方がよいかと思ひましたが、老母になれないのです。そしてとても自分は救はれない奴だと知られました時、「その駄目な、どうにもならぬしやうもやうのない私共にこそお念佛の御呼びかけがあるのです」、「大悲の親様ですよ」と教へられました。するとその通りとは思へますがその下から批判して居ります。自分もその通りに思つて念佛申してゐるがどうにもならない、それを繰り返せと言われても駄目ではないかとなるのであります。いくら熱心に説いて下さつても私はそれを皆はねかえすといふ具合であります。さうしたことを中心にして繰り返して居りますうちに最后になります。か、たすからぬのかわらぬ、治るのか、なほらぬのかそれもわからぬ、然し兎に角念佛を称へよう、それより外に道はないとなつて、一日「南無」と申しますと、「それなのだそれなのだ」と勧められ、更に南無阿彌陀佛と申しますと、自然に、「成る程お念佛一つの御救ひなのが」と体感させられて、あとはとめどなく念佛が流れ出ました。

その時に禪宗などで心と言ふ字を大きく書いて沢山の坊さんが掃除やら雑巾がけやら塵払いなどをしてゐる絵をかいであるのを思ひ出し、南無阿彌陀佛が私の心の限界まで掃除し塵を払ひ、雑巾をかけて下さることを感じました。又「木の馬がヒンヒンと鳴き、泥の牛がモーと鳴く」「張さんが酒を飲むと李さんが酔ふ」といふやうな意味の言葉もそのままに受取られました。中学時代の校長さんはこの世界を昔與へて下さつた大きな謎が解け、校長さんはこの世界を昔から知つて居られたのだとうなづかされました。斯うしてお念佛を知らせて下さつたのであります

が、當時

す内に、自分は独身では危いから嫁を貰ふのもよいといふ風に妥協し、最後は、まあ親が安心するように、親のためといふ風に心に言ひ聞かせて、外面をつくろうて結婚生活に入りました。然し内心は矢張り嫁も欲しくてならなかつたのです。結婚後一年にして子供が生れましたが、お産後に妻が氣が変になり、子供を殺すとか、お母さん子供を寝かせて呉れと云ひ、まことにお話も出来ない始末であります。そこで私は早く父を亡くしたが母の力で育てられたのだから、お前はどうか寺に居てくれるやうにと度々申しましたが、氣が狂うた者の心は正氣に帰りませず遂に寺を出て実家に行つて了ひました。結婚は致しましたが妻は氣が変になりました。朝から晩まで歎息ばかりであります。お客様でもありますと平然とした顔をして居りますが内心は火の車であります。夜小供が寝つかないで苦しみ、時には夜中に泣いてやまぬ小供のために湯をわかし粉ミルクを作りますが、作り終へた頃はもう眠つてゐたり、寝巻の上に負ひ、小守歌を歌つて寺の境内を夜びついて歩いたりいたしました。かうなつて参りますと、何と言ふ自分は不幸者であらうか、世の中は真暗である。世は、いやである、一層死んだ方がよいかと思ひましたが、老母

と子とに引かされて死ぬことも出来ませんでした。さうした時に大藏經の研究所で私と同じ研究生だつた稻津さんが、急にお念佛を唱へ出されたのでびっくりいたしましたそして稻津さんは私に向つて

「榎原さんお念佛を聞いて下さい」

としきりに私に勧められました。これが私のお念佛に遭ひ始めであります。私は一流の禪僧も駄目、二流の学者も駄目、その上人間としても妻に去られ、一切眞暗な駄目となつた時、然も稻津さんからお念佛を勧められて始め、生れた寺の眞宗の教を思ひ浮べました。禪宗で立派にやらうと力んでゐた時は、眞宗は田舎の老人達の聞く教である、ありもしない地獄極樂を説いてゐる等と言ふ偏見にて、生れた寺の眞宗の教を思ひ浮べました。禪宗で立派にとらへられてゐましたが、その時から自分は眞宗の教でなければ救はれないといふことが明らかとなり、お念佛の道を聞き始めたのであります。それから月に一回の京都学生親鸞会の御縁にあひました。自分としては一生懸命になりましたが、一応の道理を理解出来ましても味ひが出ないのであります。独りの時は念佛を申しますが、自信のない念佛で人の前ではもうひつこんでしまひます。唱えても唱えても味もすっぱもありませぬ。こうなりますと、何も仕事が手につかなくなり、決死の積りで教をうけましたが聞いて居ります私が足が痛いのを感じる、どうしても真剣

はよろこびに有頂天になり、自分は人間として最上の成功者である、日本の人々に皆このお念佛の世界に入つて貰はねばならぬ、これは大変なことなどと誇りや希望や歓びに満ちて得意になつたことがあります。それにつけても思ひ出しますのが白隱禪師であります。禪師は廿九歳の時大悟されたのであります。見性の当時には良く効いた薬でひを言つて居られます。「見性の当時には良く効いた薬であつたが、其後その薬を飲むが一向に効かぬ、どうしたことを言つて居られます。」と、有名な言葉に藉糸説話といふのがあります。それは蓮の莖を折つても、蓮の糸が引くものですが禪師はこれを譬に引かれて「自分は蓮の莖をボキッと折つたやうに見性をした。そして数年すぎてよく見ると蓮の糸がつながつてゐる。そしてこの糸の中に八万四千の魔群が指一本も傷つかずにチャンとひかへて元氣一杯で居る、さう云ふことを知らされた」と言はれて居ります。私も信心を得た、日本一の成功者だと思ひ上つて居ます中に、色々な問題につきあたりますし、段々自分の居心地が悪くなりました。自分は信心と言ふ立派な羽織を着てゐるのに、終の一念まですつかり駄目な私を御相手下さつて、飽くまでも舍利弗を呼ばれ、彼士に淨土がある、我等は臨終のみ給ふことなく御呼び下さる御慈悲を身にいたくやうになります。さうした頃から幸いに池山先生にお会ひ申し、種々お育てを蒙つて居りますうちに、しやうもやうのない臨終の心まですつかり駄目な私を御相手下さつて、飽くまでも舍利弗を呼ばれ、彼士に淨土がある、我等は臨終まで凡夫の素地のままで如何ともすることは出来ないのだが、ただお慈悲一つでつれて行つて下さるのだと繰り返しまき返しあるお説き下さつてあります。誠に身にしみて

編集後記

昭和二十七年十月十五日	印 刷
毎月一回十五日発行	
一年金五百円	一部金拾七四(郵税共)
二百四	半年金三百四(郵税共)
名古屋市南区駄上町二ノ二八	名古屋市千種区千種町馬走二八
花田正夫	花田正夫
発行人	印刷人
名古屋市千種区千種町馬走二八	本田政雄
印刷所	千草印刷所
名古屋市南区駄上町二ノ二八	
慈光社	
発行所	
一道会館	
名古屋市南区駄上町二ノ二八	
名古屋口座番号	
名古屋一〇四七〇番	
振替口座番号	

慈光 第四卷 第十号 昭和二十七年十月十五日発行(毎月一回十五日発行)
昭和二十四年七月二十三日 第三種 郵便物認可